

---

# 罪

はなちょこ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

罪

### 【ZPDF】

N1292M

### 【作者名】

はなちよ

### 【あらすじ】

智美は屋上にいた。

このまま死ぬことができたら楽なのに

そう思いながら。

その時、彼女の前に現れたのは？！

なぜ私はあの時、あんなことをしてしまったのだろう。

そうじゃなかつたら。

今頃、私は・・・・・。

黒い長い髪が風になびいた。

一步、一步、足を踏み出す。

下を見ると車も人も何もかもがノミのように見えた。

背筋がぞくつとした。

フェンスをギュッとかんだ。

大きなため息をつく。

「でも・・・・・死ねないもん・・・・・」

私がそう呟いた時だった。

ドアが勢いよく開いた音がしたと思つたら。

ものすごい勢いで後ろに倒れた。

私は何が起こったのか分からなかつた。

私の下はコンクリートの地面のはずなのに。

なぜか変な感触がした。

人間・・・・・?!

「キヤア!」

私は驚いて起き上がつた。

私の下敷きになつていた人がヨロヨロと起き上がつた。

見ると、高校生くらいの男の子だった。

その子は私を見るところ言つた。

「自殺なんかするんじゃねえ!」

その子は肩で息をしながら、そう言つた。

私は驚いてその子を見上げた。

そして「」と言つた。

「…………自殺？ 違うよ」

「え？！」

今度は男の子が驚いて目を真ん丸くした。  
綺麗な瞳だつた。

「自殺するかと思つたの？」

私がそう聞くと、男の子がしゃがみこんで頭を抱えながら「」と言つた。

「だつて三〇分以上もここにいて、何か変な予感がしてたけど、フレンスの方に近づいて行くから、まさか、と思つて走つてきたんだ」

「見てたの？」

「休憩中だつたから屋上でコーヒー飲んでた。隣のビルなんだ」

そう言つて男の子が人差し指で右側の方を指した。

男の子が指さした方を見ると、

ちょうどこのビルの右隣に同じ高さのビルがある。  
そのビルの屋上からは「」の屋上がよく見える。

「ごめん…………」

男の子が顔を上げてそう言つた。

「ううん。ありがと」

私がそう言つうと男の子が首を傾げた。

男の子が何かを口にしようとした瞬間。

私はそれを遮るように「」と言つた。

「私は智美。さとみあなたは？」

「俺は淳平」

淳平はそう言つてニッコリ笑つた。

その笑顔が眩しかつた。

「「」お「」るよ。驚かせちゃつたお詫びに」

私がそう言つて立ち上がると淳平も立ち上がつて言つた。

「「めん。 そろそろ仕事に戻らないと」

「仕事？」

「隣のビルね」

「・・・・・ 高校生くらいかと思つてた」

「これでも一四歳の社会人」

淳平の格好は白いYシャツに青色のネクタイをしていた。  
ズボンは濃いグレー。

よく見たら、淳平はスーツを着ていた。

「ごめん」

私がそう言つて少しだけ笑うと

淳平が言つた。

「今日、暇？」

「ん？ 何も予定はないけど」

「じゃあ、このビルの手前にあるカフェでコーヒー飲もうよ。 一六時」

「分かった。 一六時ね」

私がそう言つと淳平は屋上の出入り口のドアに向かつて歩き出した。

私に背中をむけたまま一度だけ手を大きく上げた。  
バタン。

扉が閉まる音が響いた。

淳平がいなくなつた屋上は静かだつた。

下で車が通る音や遠くで電車が走りすぎて行く音が聞こえるだけ。  
私はもう一度、下を見た。

そして出入り口のドアに向かつて歩き出した。

淳平が言つたカフェはこぢんまりとした店だつた。

店内は落ち着いた色で統一されていて

茶色の木の丸いテーブルの上にはピンクの花がガラスのコップに  
生けてあつた。

一五時五〇分か

私は時間を確認すると携帯をカバンにしまった。  
カフェオレを注文すると窓際に目をやつた。  
カップルが楽しそうにお喋りをしていた。

もしかしたら

淳平は来ないかもしさない  
だつて今日会つたばかりだ

からかわれただけかもしない。

でも

私が自殺をすると思つて隣のビルから、わざわざ私を止めに来てくれたんだ。

そんな人か

好いから、うれしい。

正直、来てほしい気持ちと。

「おお、良さ、ほかしてほしに気持ちで

「…………不幸となる」

その声にハツとした。

5  
0  
詩  
0

背筋が凍つていくような感覚がした。

私は立ち上がりつた。

ノルマニスムの歴史

「智美ちゃん！ いたいた！」

その声に横を見ると淳平が店に入ってきた。

「急いで仕事終わらせてきた」

そう言つた淳平は。

さつき会つた時と違つて濃いグレーの上着を羽織つてビシッヒス  
ーツを着こんでいた。

まるで私に「高校生」と言われたのを気にしているかのよつと。

「どうしたの？」

立つたままの私に淳平が不思議な顔で私を見た。

綺麗な瞳。

「座る？？」

そう言つてニシコリ笑つ淳平。

眩しい笑顔。

私には眩しすぎるくらい。

「…………うん」

私はそう言つて椅子に座つた。

淳平がホツとしたような笑顔を見せた。

私も淳平に微笑んだ。

今だけは。

今だけは。

幸せな気分に浸る？。

それくらい、いいよね…………。

私と淳平はカフェで沢山お喋りをした。

お互い映画が好きなことや。

最近、読んだ本の話。

淳平の仕事。

私は今フリーターで一〇歳の頃に上京してきたこと。

沢山、話した。

肝心なことは、隠したまま。

言えないまま。

言えるわけがない。

カフフを出て淳平は車で駅まで送ってくれた。車がロータリーに止まって私がお礼を言って車を降りようとした時だつた。

淳平に腕をつかまれた。

淳平の手が、熱い。

そして。

淳平はこう言った。

「俺と付き合つてほしいんだ」

一瞬、何を言われたのか分からなかつた。

「・・・・・え？」

「こんなこと言つと変だと思われるかもしれないけど

淳平が私の腕をつかむ手に少し力をいれた。

そして続ける。

「今日、屋上で智美を見た瞬間、運命だと思った」

淳平の顔が真っ赤だつた。

真っ直ぐに私を見つめた。

「・・・・・腕、痛いよ」

私がそう言つと淳平が慌てて手を離した。

「すぐに返事くれなくてもいいから」

淳平はそう言つと手帳を一枚破いてポケットに入つていていたボールペンで何かを書き始めた。

そしてそれを私に差し出した。

私はその紙を受け取つた。

「考えてほしい」

淳平はそれだけ言つと黙りこんだ。

私は再度お礼を言つて車から降りた。

振り返ると淳平の車はまだロータリーに止まつたままだつた。

淳平が私を見ていた。

駅のホームで電車を待つ間。

私は淳平のくれた紙を見ていた。

そこには淳平の携帯番号とアドレスが書かれてあった。

普通なら。

喜んで付き合つだらう。

でも私は・・・・・。

冷たい風が吹いた。

私は両腕を手でさすりながら。

ゴミ箱の方へ歩いた。

淳平のくれた紙をゴミ箱の上にかざす。

紙を手から離せない。

捨てたくない。

そう強く思った。

私は紙を胸に当てて両手で抱えこむようにして握りしめた。

淳平が軽い気持ちで告白してきたんじゃないことくらい。  
私にも分かった。

伝わってきた。

私もすごく嬉しかった。

でも・・・・・。

力チヤ。

聞き慣れた音がしてドアを開ける。

狭いアパート。

これが私の部屋だ。

玄関を上がつてすぐにあるスイッチを押した。

パチンという音共に真っ暗だった部屋が明るくなる。  
入つてすぐにある小さなキッキンに向かう。

冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出した。

ペットボトルから直接ミネラルウォーターを飲む。

口の周りを手で拭つた。

ため息を一つ、ついた。

目を閉じた。

淳平の顔が浮かんだ。

眩しい笑顔。

私に告白してきた時の真剣な顔。

言おう。

そう思つと目を開けた。

ベッドの上に座つてカバンから携帯を取り出した。

紙を見ながら番号を押していく。

指が震える。

信じてくれなくともいい。

軽蔑してくれもいい。

気持ち悪いと思われてもいい。

あんなに真剣な顔で想いを伝えてくれた人に。

私の本当のことを伝えたい。

・・・・・本当の姿を。

呼び出し音が鳴る。

私の胸がドクン、ドクンと大きく鳴る。

五回コールした後。

『はい』

「智美だけど」

『やつぱり！ 智美からかかつてくる仮がしてたんだ！』

電話の向こうで淳平が明るい声になつた。

私はドキドキする胸を押さえて。

小さく深呼吸をする。

『どうしたの？』

淳平が黙つたままの私にそう言った。  
不安が混じつた声。

「あのね」

そう言った瞬間、目を閉じた。  
あいつの姿が臉から離れない。  
もうずっと。

「悪魔つていると思ひう？」

『・・・・・え？ 何？』

「いふと思ひう？」

『いや・・・・・いないと思ひうけど・・・・・』

「私ね」

ベッドのシーツをギュッと握る。

「私、悪魔に会つたことあるの」

淳平が笑つた。

私が何も言わないので。

淳平がこう聞いてきた。

『・・・・・本当に？』

「うん」

腰をぬかして後ずさりする私に。

悪魔はニヤリと笑つてこう言つた。

「お前が上原智美か」

悪魔の低い声が部屋に響いた。

私は体を震わせながら頷いた。

「俺はお前を殺しにきたわけじゃない。むしろ借りを返しにきたんだ」

「…………借り？」

やつと言葉が出た。

私は震える声でそう聞いた。

「ああ。お前の曾じいさんに感謝するんだな」

「曾おじいちゃん…………？」

「お前の曾じいさんはな、俺を助けたことがあるんだ」

「…………助けた？」

「俺がまだ悪魔として未熟だつた頃にな。ヘマをしたのを助けてくれた」

私が体を震わせて黙つたまま悪魔を見た。

悪魔はニヤツと笑つてこう言つた。

「あいつは…………お前の曾じいさんは変わつた奴だつたよ。俺の姿が見えるんだからな。まあ、お前にもその血が流れてるんだな」

「借りつて…………なに？」

「ああ。簡単に言えば、ケンカに負けて怪我をしたんだ。別の悪魔に足を刺されてな。座りこんでいたら、お前の曾じいさんが俺の傷を手当してくれた。曾じいさんは俺を怖がらなかつた。なぜだと聞いてみたら、困つている者がいたらどんな生き物だろうと、俺は助ける、と言つていた」

「そうだつたんだ……」

「あいつはもう死んだんだな…………俺は、あいつに約束したんだ。必ず借りは返すつて。そしたら、あいつこう言つたんだ。

借りなんか返さなくていいって  
私はゴクンと唾を飲み込んだ。

悪魔は続ける。

「でも俺としちゃあ借りは返したい。人間に借りを作るのは嫌だつたしな。というわけで、あいつの子孫に借りを返そつたんだ。  
と言つても俺が見えなきや意味がない」

「私だけが・・・・・見えたのね・・・・・あなたの姿が・・・  
・・・・」

「ああ。俺は長いこと待てない主義でね。お前に俺の姿が見えたら、  
すぐにも借りを返そつた」

「借りを返すつて・・・・・一体何をするの?」

私は体の震えが止まらなかつた。

悪魔は私の目の前に小さなガラス瓶を差し出した。  
その中に透明な液体が入つていた。

「これはな不老不死の薬だ」

悪魔の言葉に私は驚いてその液体を見た。

「・・・・・不老不死・・・・・」

「これを飲めば、お前はこの体のまま永遠に生きられる」

「この・・・・・体・・・・・・」

「そうだ。今の若い肉体のまま永遠にだ。死ぬことはない。死ねな  
いんだ」

「殺されても?」

私はそう言つて悪魔の顔を見上げた。

「ああ。銃で撃たれようと、ナイフで刺されようと。  
病気も、事故も怖いものなしだ。もちろん自殺もできない  
・・・・・す”い」

なぜだろう。

私はその頃。

一七歳の誕生日を迎えても嬉しくなくて。  
これからどんどん歳をとるのが怖かった。  
もちろん死ぬのだと怖い。

まるで悪魔はそんな私の心を見透かしたようにそう言った。  
それに。

これは夢なんだと思っていた。

「これ、くれるの？」

私がそう言うと悪魔はまたニヤリと笑つてこう言った。

「ああ。だが、これをお前が飲むからには、代わりに誰かが死ななければいけない」

「・・・・・誰か？」

「嫌いな奴の名前を言つてくれれば、そいつが代わりに死ぬ

私はすぐに頭に浮かんだ。

私の彼氏を奪つた。

そして。

学校で私のことをイジめていた同じクラスの女。  
「嫌いな奴くらい、いるだろ?」

「悪魔の言葉!」。

私はこう言つた。

「いるよ

その日。

私は恐る恐る、その液体を飲んだ。  
ものすごく苦かった。

でも我慢して全部飲んだ。

飲んでも体に異常はなかつた。

次の日の朝。

目が覚めた時、やっぱり夢だつたんだ、と思つた。

でも。

ふとベッドの脇に目をやつて驚いた。

ベッドの脇の小さなテーブルの上にはガラスの小瓶が置いてあつた。

その瓶は空だつた。

昨夜、悪魔が持つてきた不老不死の薬の入つた小瓶。

急いで学校へ行くと。

私をイジめていた子が学校に来ていなかつた。

先生が言つた。

あの子は死んだ、と。

私は昨夜、悪魔にその子の名前を教えた。

「分かつた。そいつは今夜、死ぬ」

悪魔はそう言つてニヤツと笑つた。

その子は昨夜、死んだそうだ。

私の身代わりになつて。

私は怖くなつた。

人を殺したんだ、と思つた。

その子の死因は突然死で警察も動かなかつた。

まさか警察に出頭する勇気もなくて。

出頭したつて信じてくれるわけがない、と思つた。

私は一〇歳になつてから家を出た。

歳をとらない私を見たら家族が驚くし心配するだらうと思つたからだ。

それにこの町を早く出たかつた。

直接的ではないにしろ、私が人を殺した町から。

上京してバイトを始めた。

何をしたいかなんて考えてなかつた。

恋愛だつてできない。

歳をとらなくて死なない体。

そんなこと言つたら気味悪がられる。

それに私は人を殺してる。

そんな私に恋愛する資格なんてない。

死のうと思つてナイフで自分の胸を刺したこともある。

沢山の血が流れた。

意識を失う瞬間。

ああ、死ねるんだ、と思つた。

でも。

しばらくして目が覚めた。

私の胸に刺さつていたはずのナイフは私の横に転がつていた。

血がついていない。

胸に傷もない。

痛みもない。

あの時。

悪魔が私の部屋に来た夜。

悪魔が帰り際にこう言つたのを思い出した。

「一つ、忠告しといてやる」

「なに?」

「それを飲んでも幸せにはなれない。不幸になる」

意味が分からなかつた。

不老不死の体になれるのに。

なんで不幸になるんだろう。

嫌いな子も死ぬのに。

私は軽く考え過ぎていた。

夢だと思っていたせいもあるけど。

それにしては、甘く見ていたんだ。

電話の向こうで淳平が黙つて話を聞いていた。  
私は震える声で言つた。

「ね、私、最悪な人間でしょ」

そう言つた途端。

電話がブツツと切れた。

私は携帯を持ったまま呆然としていた。

「やつぱり・・・・・」

そう言つた私の頬に涙がつたう。

枕に顔を埋めて泣いた。

ほらね。

本当のことを話したら。

相手は離れていくだけ。

それが。

人を殺して不老不死になつた私への罰だ。  
でもまだそれは、軽い罰なんだろう。

ピーンポーン。

チャイムの音が部屋に響いた。

私は無視して布団をかぶつた。

ピーンポーン。

ピーンポーン。

チャイムの音が止んだ。

そして。

ドンドン。

ドアを叩く音が聞こえた。

「智美！ いるんだろ？ 開けろよー。」

その声に自分の耳を疑つた。

「・・・・・淳平」

私はそう呟いて慌ててドアを開けた。

淳平が立っていた。

そして私を抱きしめた。

あたたかい。

こんな感覚、どれくらいぶりだろう。

「あの話・・・・・信じてくれたの？」

私がそう言つと淳平は言つた。

「智美、いくつ？」

「・・・・・25歳」

「一に上か。確かに見えない」

淳平はそう言つて笑つた。

「・・・・・うん」

「まあ、俺も幼く見られるしさ」

「私、人を殺したのよ・・・・・」

「もう苦しまなくていいから！」

淳平は私をさつきより強く抱きしめていゝつ言つた。

「智美は・・・・・十分苦しんだろ？ 辛かつただろ？」

「・・・・・うん」

「だからと言つて消える罪じゃない。でも

淳平が私の服の裾をギュッと握る。

「俺は智美と一緒に生きたい。俺も智美の罪と一緒に背負つから」

鋭い目を、丸くさせた。

驚いたような顔で私を見た。

腕から黒い液体が流れていた。

私は持っていたハンカチを大きな腕の傷口に当てた。

ハンカチが見る見る内に黒く染まつた。

「・・・・・一度も会うとは思わなかつた

悪魔がそう言つてニヤツと笑つ。

でもその顔は痛みでひきつっていた。

「また別の悪魔にやられたのね。ケンカに弱いのね」

「ああ・・・・・昔からだ」

私はカバンから包帯を取り出して悪魔の腕の傷口をきつへしづけた。

「探したのよ」

私がそう言つと悪魔が言つた。

「初めて会つた時から・・・・・六〇年くらい経つたか」

「七〇年よ」

「そうか。本当に初めて会つた頃と全く変わらないな

「・・・・・ええ。これでも年齢はハ七歳」

「化け物みたいだな」

「あなたに言われたくないわね」

私はそう言つと空を見上げた。

真つ暗な空だ。

淳平の顔が浮かぶ。

眩しい笑顔が。

今まで本当に幸せだった。

心の底から笑了。

毎日がキラキラと輝いていた。

それは。

隣に淳平がいたから。

今でも淳平が昔、言つた言葉を思い出す。

「俺は智美と一緒に生きたい。俺も智美の罪と一緒に背負つから」

あの時のこととは今でもハツキリと覚えている。

まるで昨日のことのようだ。

悪魔の腕から出る黒い血が少なくなってきた。

悪魔はニヤツと笑つた。

初めて会つた、あの時のように。  
そして私を見てこう言つた。

「借りは返さないとな。望みはなんだ？」  
私は悪魔を見て微笑んでこう言つた。

「殺してほしいの」

悪魔の目がまた丸くなつた。

「淳平は一年前に死んだ。だから私はもう生きる意味がないの」

淳平のいない世界は。

私にとつては地獄。

淳平のいる天国へ行きたいなんて贅沢は言わない。  
だけど。

淳平がいなこの世界で生きられない。

淳平がいななら生きている意味がない。

「あなたなら、私のことを殺せるでしょ？」

私の言葉に悪魔は頷いた。

薄れゆく意識の中で。

真つ暗だつた空から突然、眩しい光が見えた。

淳平の笑顔が見えた気がした。

(おわり)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1292m/>

---

罪

2010年10月8日14時36分発行